名古屋市科学館紀要　第45号　19－21　2019年

名古屋市熱田区高蔵古墳群の石材産地

Origin of cobbles from the Takakura old tombs, Nagoya City

西　本　昌　司*・伊　藤　厚　史**

NISHIMOTO Shoji・ITO Atsushi

１．はじめに

高蔵古墳群は，名古屋市熱田区高蔵町の高座結御子神社と高蔵公園内に所在している（図１）。周辺も含めれば，多くの古墳があったと思われるが，調査が行われることなく開発で失われた。昭和29年に名古屋大学によって調査された高蔵１号墳（直径18m，高さ2.5mの円墳）では，川原石を積んだ横穴式石室が出土[1)]，岐阜県可児市の古墳と似ていることが指摘され[2)]，熱田と可児の豪族の関係性を示唆するものだと言われている。しかしながら，高蔵１号墳と２号墳は，高蔵公園の整備に伴い滅失しているため，もはや調査できない。

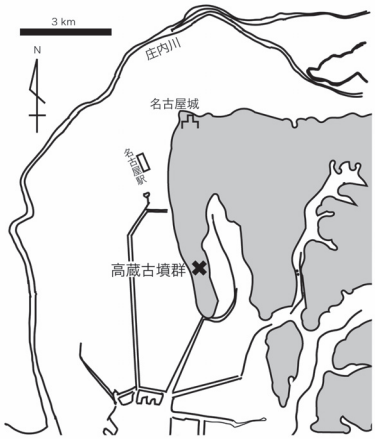

図１：高蔵古墳の位置

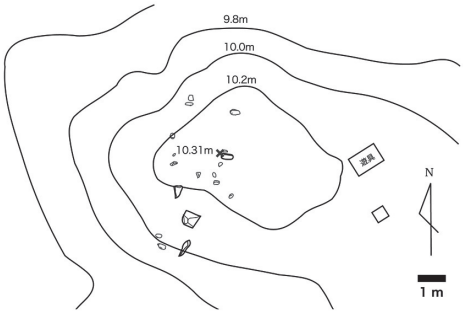

図２：高蔵７号墳における石材出土位置

現存している高蔵３，４号墳は高座結御子神社境内にあるが未調査であり，葺石や横穴式石室の存在は分かりにくい。高蔵公園にある高蔵５号墳では，平成29年度の試掘調査により埴輪や須恵器が発見され，５世紀末～６世紀初頭のものと推測された[3)]ものの，葺石の存在は確認されていない。

高蔵公園の再整備を契機とした平成29年度と30年度の調査で，全体の形状は明瞭（図２）ではないものの，それぞれ７号墳（直径16mの円墳）と８号墳（直径17～18mの円墳）（図３）が新たに確認され，川原の礫と思われる石材が出土した。礫の岩石種によって，可児の古墳との関係性を示すことができるかもしれない。そこで，これらの古墳で出土した石材について調べたので報告する。

２．石材の出土状況

高蔵７号墳では，墳丘の高さ50cmほどの高まり部分の地下から，長径20～30cm程度の20数個の円磨度が高い石が垂直に積まれた状態で出土した（図１，写真１）。墳丘上には円磨度が低い石が散在し

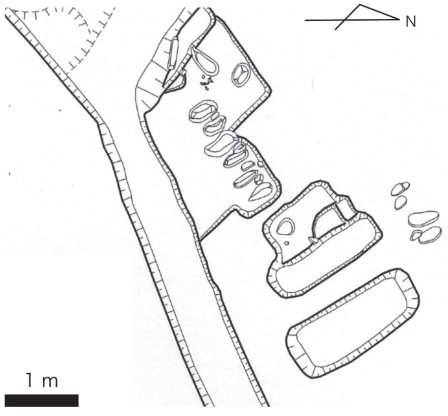

図３：高倉８号墳の図

*名古屋市科学館学芸課
**名古屋市教育委員会文化財保護室

写真１：高蔵７号墳における石材出土状況

写真３：石英片を含む流紋岩質溶結凝灰岩（高蔵８号墳）

写真２：高蔵８号墳における石材出土状況

写真４：石英片を含む安山岩（高蔵８号墳）

ている。残存する横穴式石室の側壁の石の一部が露出している状況である。

高蔵８号墳では，円磨度が高く長径20～30cm程度の細長い石が直線状に積まれているのが確認され（写真２）た。石の長径方向を合わせるようにして並べてあり，２列の石との位置関係から横穴式石室の側壁部分だった可能性が高い。周辺からは石材が出土していなかったので，墳丘の表面に使われていた石はほとんどなかったと思われる。

なお，７号墳からの出土遺物はなかったが，８号墳からは須恵器が出土している。須恵器から７世紀前半～中葉と推定される。

３．石材の岩石種

発掘で出土した石材の岩石種は，高蔵７号墳と８号墳とで違いは見られず，石英片を含む流紋岩質溶結凝灰岩（写真３）で，濃飛流紋岩類にあたるものがほとんどであった。一部に表面が灰色の石基中に有色鉱物（おそらく輝石）と斜長石の斑晶が識別できる火山岩が認められ（写真４），肉眼で見る限り安山岩～玄武岩と思われる。白色化した風化皮膜があるようには見えない。この灰色火山岩礫は，本古墳の石材を特徴付ける岩石種である。なお，３個見つかった円磨度が低い岩石はホルンフェルス化した美濃帯の堆積岩に見えた。

４．考察

出土した石材はいずれも風化皮膜が見られないことから，段丘堆積物ではなく，河川から直接採取された礫（いわゆる川原石）と考えられる。

高蔵公園の発掘現場で露出した地層は，主に黄褐色～灰色の中粒砂から構成されており，熱田層上部にあたると考えられる。熱田層上部は砂層が卓越し，礫層がない[4]ことから，これほど大きな礫を熱田台地で得たとは考えにくく，遠方の河川で採取され持ち込まれたものと考えられる。実際，段丘礫が使われている名古屋市守山区志段味地区の古墳に使われている葺石[5]と比べても，サイズと岩石種が異

なる。

高蔵７・８号墳で出土した礫の産地としてまず候補に上がるのは，名古屋市内で最大の河川である庄内川である。しかし，庄内川の礫は，瀬戸層群や段丘礫層に含まれていた礫が再堆積したものが多く，10cm以下のものが多い。また，庄内川では，中流域（定光寺～古虎渓付近）に大きな礫が見られるが，主に熱変成を受けた美濃帯堆積岩であり，産地とは考えにくい。

大きな礫が採取できる河川として候補に上がるのは木曽川である。木曽川の礫で特に多いのが濃飛流紋岩類である。美濃加茂市の木曽川で転石を調べたところ，20cm以上の礫は90%が濃飛流紋岩であった。上流には，御嶽山付近の第四紀火山岩や，形成年代（2.0-2.2 Ma; K-Ar）[6] の上野玄武岩があり，川原に礫が供給されている。高蔵古墳で出土した灰色火山岩礫には，斜長石と有色鉱物の斑晶が明瞭に見えることから，カンラン石に富み斜長石斑晶はほとんど含まれないとされる上野玄武岩[6] ではないと考えられる。よって，御嶽山の火山活動による火山岩である可能性が高い。

長良川でも，濃飛流紋岩類と灰色火山岩の両方が礫として見られるが，多いのは美濃帯堆積岩類であり，木曽川より遠方より運ばれることは考えにくい。これらのことを考慮すると，高蔵７・８号墳で出土した礫は，木曽川のものだと考えるのが妥当である。

５．次郎兵衛塚一号墳葺石との比較

高蔵古墳と似ているとされる岐阜県可児市の古墳のうち，可児市川合地区にある次郎兵衛塚一号墳（写真５）の葺石を観察した。首長級の古墳と言われる高さ約6.5mの墳丘全面が円礫の葺石で覆われており，5世紀末ごろから築造が始められたと考えられている[2]。葺石の礫種は，多くが濃飛流紋岩類であるが，花崗岩類や安山岩類も見られ，そばを流れる木曽川の礫が使われたものと考えられる。高蔵７・８号墳で出土した灰色安山岩と似た岩石も使われており，葺石の材料は似ていると言える。このことは，熱田と可児の豪族に交流があったという説を支持するものである。

写真５：次郎兵衛塚一号墳

６．まとめ

名古屋市熱田区高蔵公園の高蔵７号墳と８号墳から出土した礫は，ほとんどが濃飛流紋岩類で，安山岩を伴っており，木曽川から運ばれてきたと考えられる。岐阜県可児市の古墳に葺石として使われている礫も同様であり，石材の点から見て，古墳時代に熱田と可児の豪族に交流があった可能性は高い。

文献

1）楢崎彰一（1955）名古屋市熱田区高蔵第１号墳の調査．名古屋大学文学部研究論集 11．10p.
2）服部哲也・木村有作・纐纈茂（2008）なごやの古代遺跡を歩く．風媒社
3）名古屋市教育委員会（2018）高蔵遺跡第 60 次発掘調査現地説明会資料
4）坂本 亨・高田康秀・桑原 徹・糸魚川淳二（1986）名古屋南部地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅），地質調査所，55p.
5）西本昌司・伊藤厚史（2015）名古屋市志段味大塚古墳の葺石および周辺地域の礫層中の礫種について．名古屋市科学館紀要 vol.41，pp.32-34.
6）中野 俊・宇都浩三・内海 茂（2000）上野玄武岩類および地蔵峠火山岩類の K-Ar 年代と化学組成の時間変化．火山 Vol.45，p.87-105.